



Title	かず子の＜革命＞、サチ子の＜退屈＞：太宰治『斜陽』と坂口安吾『青鬼の禪を洗う女』
Author(s)	滝口, 明祥
Citation	太宰治スタディーズ. 2006, 1, p. 141-158
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97260
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

かず子の〈革命〉、サチ子の〈退屈〉

——太宰治『斜陽』と坂口安吾『青鬼の禪を洗う女』——

滝 口 明 祥

○、はじめに

本論に入る前に、豊島與志雄について少し触れておきたい。豊島は『湖水と彼等』（新思潮）でデビューして以来、知的・幻想的な作風をもって知られ、文壇の中に独特な位置を占めていた作家である。『レ・ミゼラブル』などの翻訳でも知られているだろう。そして何故ここで豊島に言及するかと言えば、戦後において太宰治と坂口安吾という二人の作家が彼のことを慕っていたからなのである。

安吾は豊島について、「死んだ太宰も、田中秀光も、死ぬ直前に豊島さんをお訪ねしている。死の直前にお逢いたくなる唯一のお人柄なのである。私は自殺するような人間ではないが、それでも死にたいような気持ちのときに、やっぱり思い出すのは豊島さんだ。」⁽¹⁾と述べている。

豊島のこのような人柄は、太宰が書いた豊島『高尾さんげ』（新潮文庫、一九四八・六）の解説からも伺えるだろう。太宰は戦後、それまで親しんでいた井伏鱒二から離れていくのに比例するように豊島に近づいていった。⁽²⁾太宰の生前に刊行が開始された『太宰治全集』（一九四八・四）、八雲書店）の解説は豊島が担当しているし、太宰の葬儀の際も委員長を務めている。そしてここで注目したいのは、豊島が戦後まもなくの一九四六年二月に書いた次のような文章だ。

ところで今回、華族をはじめ種々の上層階級、つまり貴族階級が、一般民衆の中に埋没されようとするに当って、諸君は、貴族もみな平民になるのだと考えてはいないか。だが、これを逆に、平民もすべて貴族になるのだとなぜ考えてはいないか。寧ろそう考えるべきではあるまいか。単に身分階級のことでは

なく、心の持ち方について言うのである。⁽³⁾

戦後における貴族と言え、思い出されるのが太宰治の『斜陽』だろう。そこにおける「貴族」とは、滅び行く階級を表していたものであった。『斜陽』は太宰のセンセーショナルな死によってますます広く読まれるようになったのだが、同じ頃、高木正得元子爵の自死⁽⁴⁾に代表される「没落貴族」の話題が紙面をにぎわせてもいた。しかし豊島が言う「貴族」はそういうものとは少し違うようだ。それは「身分階級」ではなく、「心の持ち方」だと言うのである。

茲に言う貴族主義とは、社会生活上のそれとは異なる。権勢や富や華美など、階級的な特権を意味するのではない。卑俗とは生命力の微弱なことを言い、高貴とは生命力の強健なことを言うのだと、太陽の光のなかで考える、そういう性質を意味するのである。それ故にこの貴族主義者は、精神的に甚だ多欲なのである。あらゆることを見、あらゆることを夢みようとすると、神に身を任せると共に、悪魔にも身を任せる。(……)彼はついに己を破滅させるかも知れない。然し彼は言うであろう、自由のうちに破滅するのは本望だ。自由がこのように利用されることは太陽的である。自由とは自律の自由に他ならないと理解

されるのであるが、ここではもはや、生長発展も破綻破滅も共に自律的なものとなる。⁽⁵⁾

豊島の言う「貴族」は通常イメージされるものとは違い、力強い。「貴族」とは、「精神的に甚だ多欲」であり、「自由」である。その「自由」とは「己を破滅させるかも知れない」ようなものであり、「太陽的」と形容されるようなもののだ。

おそらく当時、他にこのようなイメージで「貴族」という言葉を使った人はいなかっただろうが、ここで豊島が言っている内容自体は決して孤立的なものでは無い。それは同時代において広く共有されていた心情から出てきたものである。そしてまた同時に、その中の豊島の異質性というのももちろんあるだろう。太宰や安吾が惹かれたというのも、実にそこに関わっているはずである。

本稿は、この豊島の言が出てきたような背景の中に太宰の『斜陽』と安吾の『青鬼の禪を洗う女』という二つの小説を位置づけ直す試みである。両者は多くの点で似通っており、また違っている。両者を比較することで、それぞれの特質もいっそう明らかになっていくだろう。

一、かず子とサチ子

『斜陽』と『青鬼の禪を洗う女』（以下、『青鬼』）は、どちらも一九四七年の発表である。もともと『斜陽』が大きく注目を集めたのに対して、『青鬼』のほうはあまり注目されなかったらしく、同時代評もほとんどない。⁽⁶⁾

しかし先述したように、両者には多くの共通点がある。第一に、女性の一人称で語られていることである。『斜陽』はかず子、『青鬼』はサチ子という女性が主人公であり、それぞれ彼女らの一人称によって物語が語られていく。ただし、『斜陽』の場合はかず子の語りとは言っても手記や書簡が複雑に絡み合って構成されており、その他に直治の手記や遺書などが挿入されているのではあるが。

第二に、母と娘の関係が描かれていることである。これは裏返せば父親の不在ということを示している。かず子の父親は何年も前に亡くなっているのであり、サチ子はずっと母親との二人暮らしであつた。それだけに、母娘の関係が濃密になっているのだ。

第三に、戦中から戦後にかけての時期を舞台にしていることである。『斜陽』において、かず子の手記が書かれ始めるのは一九四六年四月のことであり、かず子が最後の手紙を書いたのは二・一ゼネスト中止直後の一九四七年二月七日のことであつた。そしてその折々

に、戦中の回想などが挟み込まれているのである。また『青鬼』のほうも語りの現在には戦後であり、戦中の徴用や空襲のことなどが回想されていく形をとっている。

だが、そうした共通点がある一方、この二人の主人公は対照的と言つてよいほど違つているように見える。『斜陽』のかず子が華族階級に属するのに対して、『青鬼』のサチ子はオメカケの子なのだ。また、両作品とも母と娘の関係が描かれているとは言え、その関係性はかなり違うものでもある。

かず子は母親のことを慕っているようだ。たまにはケンカもするものの、これまで母親にへいい気になつて甘えて育つて来たと言ふ。そして母親が死にそうになると、心から心配しもある。そもそも母親のことをへお母さまと呼んでいるのだ。それに対して、サチ子は母親のことを嫌っているようである。母親はサチ子のことを可愛がつたが、それはへ迷惑千万だつたと言ふ。そして母親が死んだときにもへ母がいなという当然さを意識したに過ぎないと言ふのだ。もつとも両者とも、母親との関係はそう一面的なものではなく、単純に言うことは出来ない。しかし、この点については後述しよう。

戦争に対しては、彼女たちの態度は似通つているように思われる。かず子はへ思えば、戦争なんて、つまらないものだつた、へ戦争の

追憶は語るのも、聞くのも、いやだ。人がたくさん死んだのに、それでも陳腐で退屈だ」と言えば、サチ子も戦争には「大して関心を持っていないかつた」と言う。

ただし、いわゆる世間の価値観に対しては、両者の態度は異なっていたようだ。サチ子がそんなものを初めから問題にしていなかったのに対して、かず子の場合はそうでは無かった。それは二人の階級差とも関わっているように思われる。いわば、オメカケの子であるサチ子は初めから世間の外側に位置していたのだ。⁽¹⁾しかし、かず子は次のように言う。

いままで世間のおとなたちは、この革命と恋の二つを、最も愚かしく、いまはいいものとして私たちに教へ、戦争の前も、戦争中も、私たちはそのとほりに思ひ込んでゐたのだが、敗戦後、私たちは世間のおとなを信頼しなくなつて、何でもあのひとたちの言ふ事の反対のほうに本当の生きる道があるやうな気がして来て、革命も恋も、実はこの世で最もよくて、おいしい事で、あまりいい事だから、おとなのひとたちは意地わるく私たちに青い葡萄だと嘘ついて教えてゐたのに違ひないと思ふやうになつたのだ。私は確信したい。人間は恋と革命のために生れて来たのだ。

〔斜陽〕

かず子は「世間のおとなたち」が言うことを戦前も戦中も変わらず「そのとほりに思ひ込んでゐた」のだが、それに疑念を抱くようになったのだと言う。そしてそれは「敗戦後」のことだったと言うのだ。「戦争だ、敗戦だ、民主主義だ、悲憤慷慨、熱狂協力、ケンケンガクガク、力みかえつて大変な騒ぎだけれども、私たちは世界のことは人が動かしてくれるものだときめているから勝手にまかせて、世相の移り変りには風馬耳、その時々⁽²⁾の愉しみを見つけて滑りこむ。」と言うサチ子とは鮮やかな対照を示しているだろう。サチ子が戦中から戦後にかけて基本的にその認識を変化させていないのに対して、かず子は明らかな変化を見せているのである。

サチ子は空襲で焼け野原になつた風景を眺めたときのことを、次のように回想している。

翌日あまりにも予期を絶した戦争の破壊のあとを眺めたとき、私は住む家も身寄りの人も失つていたが、私はしかしむしろ希望にもえていた。私は戦争や破壊を愛しはしない。私は私に迫る恐怖は嫌いだ。私はしかし古い何かが亡びて行く、新しい何かが近づいてくる、私はそれが何物であるか明確には知ることはできなかつたが、私にとつては過去よりも不幸ではない何か近づいてくるのを感じつつけていたのだ。

〔青鬼〕

これは東京大空襲後の情景であって、まだ「敗戦」には至っていない場面なのだが、この廃墟はそれを明らかに予感させるものである。この時サチ子は「希望」を感じている。近づいてくる「新らしい何か」を感じている。サチ子にとって、「日本の滅亡」など少しも問題ではなく、むしろそれは「夜明け」でさえあった。だが、サチ子その期待は戦後において裏切られていったのである。一方、かず子も戦後、次のような「焦燥」を抱えている。

ああ、かうして書いてみると、いかにも私たちは、いつかお母さまのおつしやつたやうに、いちど死んで、違ふ私たちになつてよみがへつたやうでもあるが、しかし、イエスさまのやうな復活は、所詮、人間には出来ないのではなからうか。お母さまは、あんなふうにおつしやつたけれども、それでもやはり、スウプを一さじ吸つては、直治を思ひ、あ、とお叫びになる。さうして私の過去の傷痕も、実は、ちつともなほつてゐはしないのである。

〔斜陽〕

ここでもかず子が背立っているのは、自身を含めた人間の「変わらなさ」に対してである。認識が変化したからこそ、「変わらなさ」を強く意識するようになったのだ。また、サチ子も戦中戦後を通じて

変わらない人間性に対して「退屈」を感じている。「戦争だ、敗戦だ、民主主義だ」、そうやって世相は移り変わっていくけれども、人間は相変わらずなのである。「新しい何か」など、結局来なかったのだ。しかし、サチ子がそれに対して何か積極的な行動を起こそうとはしないのに対して、かず子は「恋と革命」を主張し、積極的に行動するようになっていく。おそらく二人の一番の差異も、ここにあるだろう。

だが、かず子の言う「革命」とは具体的には何を意味しているのだろうか。しかし、それについて考えるには、まず同時代において「革命」という言葉がどのように捉えられていたのかを見てみる必要があるようだ。

二、「革命」

戦後において、「革命」をめぐる言説をリードしていたのは戦前から革命を目指していた共産党である。一九四六年一月に中国から帰国し、「愛される共産党」を唱えた野坂参三の主導のもと、同党は同年二月の第五回大会で平和革命の方針を採択した。ブルジョア民主主義革命およびそれに続く社会主義革命は暴力に拠らず平和的かつ民主主義的な方法で達成されるとしたのである。

野坂の平和革命論は日本人の「封建制」を打ち破る「解放軍」＝G

HQの存在を前提としたものであった。GHQが言わば「上からの民主化」を推し進めたとすれば、野坂はそれと協調しつつ、議会を通じて、或いは大衆運動に結びつくことによって「下からの民主化」を目指したのである。そのような野坂の主張は、共産党内の複雑な力関係のもとでときに妥協を余儀なくされたものの、広い範囲に大きな影響を与えた。

石渡貞雄・羽仁五郎・井上清・石母田正による座談会「民主革命と日本の社会」⁽⁸⁾では、石母田が「日本は明治以来、人間を本当に変える機会がなかった」と発言し、石渡が「日本の人民も急に自由を与えられても、すぐにはほんとうの自由の行使という方向にはゆきがたく、ときに無規律に流れたりもするが、これを性急に結論づけて、自由はいかんとか、日本人には自由はわかんとかいうのは、非常なまちがいです」と言い、羽仁が「われわれは日本の後進性を徹底的に批判し、脱却しなければならぬ」と述べるのである。

また、阿部真之介・岩淵辰雄・神山茂夫による座談会「民主革命を阻むもの」⁽⁹⁾では、阿部は「僕は実際は、日本の民衆というものについてにはあなた方よりももつと批判的なんですよ」と言い、次のように続けている。

たとえば、一昨年の八月十五日までは八千万人はみな全体主

義者だったのです。それが十六日になると、もう一人残らず民主主義者になってしまっている。そんなことがありますか。

「……」今や何か左の方を向いて強そうなことを云う奴が一番錦の御旗を持つてゐる訳だ。それでワーワーというから三百万でも四百万でもゆくんて、みな自発的に考えて行つたと考へるほど―そう迄は樂觀的になれない。もつと批判的に考へているわけです。

それに対して神山は、「その点は同感です」としながらも、「しかし、これがあるから厭だといったつて、この日本人を相手に日本の民主主義革命をしなければ革命もできないのだ」と言い、岩淵も「国民の意識の変革を成し遂げる事業」の必要性を訴えるのである。

このような日本人＝民衆の「後進性」の指摘は、おそらく河上徹太郎「配給された「自由」⁽¹⁰⁾」が先鞭をつけたものだろう。河上はそのことによって「革命」を目指す勢力を揶揄したわけだが、揶揄された側は河上とその民衆観を半ば共有しながらも「革命」の必要性についてはあくまでも固守したのである。その場合、制度や法律を改革するだけでは不十分であり、日本人の「意識の変革」が必要だとされた。それらは制度上の変革を意味する「外部革命」に対して「内部革命」、或いは「精神革命」などとも言われた。「政治上の改革は

一日にして行はれるが、人間の变化はそうは行かない」と安吾は『墮落論』⁽¹¹⁾の中で述べたが、そうした認識自体はかなり広い範囲で共有されていたと言つてよいだろう。そうした人間性の変革を求めるときに当時しきりに主張されたのが「主体性」であった。

いわゆる「戦後主体性論争」とは、哲学、社会思想、文学などのきわめて広い範囲において当時行われたものである。それら全てを論じるのは困難だが、先行研究の整理などに拠りながらとりあえずまとめておけば以下になるだろう。⁽¹²⁾

まず哲学の分野において議論をリードしたのは梅本克己である。

梅本はマルクス主義における歴史の必然性と人間の主体性との間にある「空隙」を問題にした。そこには実存主義とも響き合う問題意識があつたのだが、その「空隙」を埋めるために持ち出されたのは和辻哲郎流の倫理であつた。かくして梅本の言う「主体」にはまず自己否定が必要とされ、プロレタリアートへの「献身」が説かれるのである。

社会思想においては、丸山真男と大塚久雄が代表格だと言えるだろう。大塚はウェーバーに拠りながら、近代のエートスによつて動機付けられた「主体」の必要性を訴える。そのような大塚の「主体」は社会的総体Ⅱ国民国家のために働くように定められており、それに完全に従属するものであつた。また、丸山にとつても重要だつた

のは日本を近代化させることであり、そのために人々は「主体Ⅱ」⁽¹³⁾「国民」になることを求められたのである。

彼ら主体性論者に共通していたのは、「主体」を実体的なものとして捉える態度であつた。また、丸山や大塚の「主体」が、総動員体制下の論理との連続性を持つことをも近年では指摘されている。大政翼賛運動の中で強調された国民の自発性と、彼らの唱える国家という枠の中の「主体性」とは、実はつながっているのではない。あくまでも彼らの主観としては「断絶」、つまり戦時中からの変革を願う「主体性」を持つことを訴えたのだが、そこに今日からみて限界があることは否定できない。彼らにとつて日本人の「後進性」は封建制Ⅱ前近代性として把握され、そのために逆に「近代」が持つ問題点が視野の外へと逃れ出てしまつた。近年では、戦後において前近代性として認識された天皇制や家族制度こそが他ならぬ近代の産物だつたとも指摘されており、戦後思想の相対化が進められている。「断絶」を創り出そうとした戦後知識人の盲点となつていた「連続」の面へと目が向けられているのである。⁽¹³⁾

ただし、そのように哲学や社会思想の分野で説かれる「主体」が結局は「党」や「国家」といった全体性に従属してしまうようなものであつたのに対して、文学においてはやや様子が違つていたようだ。そこにおいて議論の中心を担つたのは荒正人をはじめとする「近

代文学」の同人たちである。彼らは、外部の權威に從属する前に、まずは自身のエゴイズム、卑小さを見つめることの重要性を主張した。⁽¹⁴⁾

「近代文学」同人たちが「人間」誌上において行った座談会「文学者の責務」において、荒正人は次のように発言している。

文学者が文学的に天皇の戦争責任を追求するならば、自分の内部にある「天皇制」に根ざす半封建的な感覚、感情、意欲——さういふものとの戦ひにおいて始めて天皇制を否定することができ、究極において、近代的な人間の確立といふ一筋の途が開けて来るんぢやないか。⁽¹⁵⁾

また、小田切秀雄は別の論文の中で、「民衆の体内をどれだけの「奴隸の血」(チエーホフ)がめぐるやうにさせられてゐるか、これを吾々はおそれるところなく直視しなければならぬ。」と述べたうえで、それはただ「民衆」の問題というわけでは無いとも言う。

こんにち口をぬぐつて美辭麗句をならべ得るどれだけの文学者があるか。この十年間を自分がどう生きて来たかを直視し、そこでの自身のあり方をいま自分みづからのはげしい追求の前

に置かずにすむやうな文学者がどれだけあるか。人間は一朝にして変り得るものではない。終戦後の文学の出発の足場は終戦までの自身以外にありはしない。⁽¹⁶⁾

自身の内部にある「天皇制」或いは「奴隸の血」を拭うために彼らは「主体性」を持つことを主張するのである。しかもその際、「党」や「民衆」といった外部の權威を立てることによって自己を否定するのではなく、あくまでも自身の「醜さ」を認めることから出発せよ、と言うのだ。そうすることで「エゴイズム」から「ヒューマニズム」への拡充も初めて可能なのだというのが荒たちの主張である。哲学や社会思想の分野における主体性論者たちとの違いは明らかだと言えよう。

彼らの主張は安易な「外部」を立てることでそれに從属してしまうような在り方を批判するものであり、同時代においては十分に意義があるものであった。しかし、そうした彼らも「主体」を実体的なものとして捉えるという点ではやはり丸山などと共通していたのであり、ひたすら「内部」「自己」を見つめることを求める荒の態度は、しばしば独我論に陥るきらいもあった。

ところで戦時中、荒たち「近代文学」の同人と坂口安吾と一緒に「現代文学」という雑誌をやっていたことはよく知られている。そ

して実際、戦後においても彼らの考えはきわめて近い位置にあった。自身の「エゴイズム」をみつめることを主張した荒と「墮落」の徹底を説いた安吾とは、ともに全体性へと従属するような自律的な「主体」を拒否したという点では共通している。或いは、彼らはそれは違う形の「主体」を求めていたとも言えるだろう。⁽¹⁷⁾

しかし、そこで提起された「主体」もまた一樣なものでは無い。柄谷行人は荒と安吾とについて、「ある点で、彼らはよく似ている」と述べつつも、荒が「力み返っていること」において安吾との差異を見出している。⁽¹⁸⁾それは彼らの「主体」に対する考え方ともつながってくるのであり、自律的では無いという点では共通しているように見える文学者たちの「主体」も実際には微妙な差異を孕んでいたのである。

戦後において、さまざまな人たちが「主体性」を持つことの重要性を主張した。それは戦時中の自身の生き方に対する「悔恨」から生れた切実なものであった。彼らが対峙していたのは、たとえば一億総懺悔論に代表されるような戦中と寸毫も変わらない「国民の道義」を主張して憚らないような勢力であり、或いは戦時中の自身の在り方を何ら省みることなく「民主主義」を唱え出すような人々の心性であった。⁽¹⁹⁾そのために、「内部革命」や「精神革命」が言われたのである。かず子の「革命」もひとまずはそうしたもののの中に位置

づけることが出来るだろう。ただし、それらがあくまでも「平和革命」を前提としていたのに対して、かず子の「革命」には、そこに収まりきれないような過剰さが含まれているようにも思える。

三、生／死

『斜陽』を読む際に気付くのは、しきりに生／死をめぐる言説が繰り返されることである。たとえば、最初の場面では直治のことを心配するお母さまに対して、かず子は次のように言う。

「大丈夫よ。直治は、大丈夫よ。直治みたいな悪漢は、なかなか死ぬものぢやないわよ。死ぬひとは、きまつて、おとなしくて綺麗で、やさしいものだわ。直治なんて、棒でたたいたつて、死にやしない。」

お母さまは笑つて、
「それぢや、かず子さんは早死にのはうかな？」

と私をからかう。

（『斜陽』）

ここで、「悪漢＝長生き」か「綺麗なひと＝早死に」か、という二項対立が持ち出されているのだが、そうすることによってかず子は二律背反的な状況に置かれてしまうことになる。お母さまが「綺麗

なひとであるならば「お母さま『早死に』ということになり、へ早死に」を否定するには「綺麗なひと」をも否定しなければならぬのだ。もちろんかず子にはどちらも選ぶことはできない。そしてこのことを機に、へ何だか自分の胸の奥に、お母さまのお命をちぢめる気味わるい小蛇が一匹はいり込んでいるよう」に思うことになるのである。へほんものの貴族である」とされるお母さまと、自身との差が認識されているのだ。もちろんそれは自身を「悪漢『長生き』」の側に位置づけることへとつながっていくだろう。

そもそもお母さまは、西片町の家を出るときに「死んだほうがよいのです」と繰り返し語っていた。伊豆の山荘に来てからは「神さまが私をいちどお殺しになつて、それから昨日までの私と違ふ私にして、よみがへらせて下さつたのだわ」と思い直すのだが、しかしそれはかず子によれば「へいつはり」に過ぎないようなものであった。そしてかず子もまた、「過去の傷跡」へ「死んで生れた」子供のことを思い出し、「へあ」と呟くのだ。

その後も、お母さまとかず子の間には生／死をめぐる会話が交わされる。

「夏の花が好きなのは、夏に死ぬつていふけれども、本当かしら。」

けふもお母さまは、私の畑仕事をじつと見ていらして、ふいとそんな事をおつしやつた。私は黙つておナスに水をやつてゐた。ああ、さういへば、もう初夏だ。

(……)

「あれは、きらひなの。夏の花は、たいていすきだけど、あれは、おきやんすぎて。」

「私なら、薔薇がいいな。だけど、あれは四季咲きだから、薔薇の好きなひとは、春に死んで、夏に死んで、秋に死んで、冬に死んで、四度も死に直さなければいけないの？」

二人、笑つた。

(『斜陽』)

『斜陽』は太宰作品にはめずらしく実に数多くの植物が登場し、それらが四季の移り変わりを鮮やかに表現してもいるのだが、その中でも特に印象的な場面である。ここでは、笑いに紛らされながらも「夏の花が好きなのは、夏に死ぬ」という言葉によって、へ夏の花が好きなのへお母さまの死が予感されている。事実、お母さまはこの後ますます衰弱していくのだが、一方かず子は次のように宣言するのである。

けれども、私は生きて行かなければならないのだ。子供かも

知れないけれども、しかし、甘えてばかりもをられなくなつた。私はこれから世間と争つて行かなければならないのだ。(……)死んで行くひとは美しい。生きるといふ事。生き残るといふ事。それは、たいへん醜くて、血の匂ひのする、きたならしい事のやうな氣もする。(……)けれども、私には、あきらめ切れないものがあるのだ。あさましくてもよい、私は生き残つて、思ふ事をしとげるために世間と争つて行かう。(『斜陽』)

ここで再びかず子は、生(Ⅱ醜い)／死(Ⅱ美しい)という二項対立を持ち出し、自身を明確に前者の側に位置づける。へ私は生きて行かなければならないへ世間と争つて行かなければならないへと繰り返すかず子が言うへあきらめ切れないものへ思ふ事の内容としてはへ革命へが入るのだろう。前節で述べたように、戦後においては「内部革命」或いは「精神革命」が言われた。それは「意識の変革」を意味するものだったのだが、かず子にとってはそれはまず第一にへ貴族へ的感性からの脱却を意味していたのである。

『斜陽』における「貴族」とは、いわば「滅びの美」を象徴するやうなものとして表象される。へほんものの貴族へであるとされるお母さまは、常に他者に従属するような存在でもある。たとえば、伊豆の山荘に引越すことを決めたのも叔父(お母さまの弟)の言葉に

従つたからだつた。お母さまは、へ和田の叔父さまが、いい所だとおつしやるのだもの。私は、このまま、眼をつぶつてそのお家へ移つて行つても、いいやうな氣がする。へと言うのである。そしてその後、かず子を宮家へ奉公に出せという指示に対しては、かず子が嫌がつたことによつて背くことになるのだが、今度は直治に対してへなんでも信じて従はうへという姿勢になるのである。かず子はそうしたお母さまに惹かれながらも、自身はそこから踏み出さなければならなかつたのだ。

たしかに冒頭の場面から、へほんものの貴族へであるとされるお母さまと、かず子(や直治)は区別されていたのだが、かず子たちもへ高等御乞食へⅡにせもののへ貴族へではあつたのであり、その限りにおいてへ民衆へとは区別される存在であつた。火事の場面において、かず子がへ落ちぶれたへ或いはへ亡くなつたお父上のお名前をけがしてしまふへなどと述べていたことから、それは知れるだろう。しかし、へ革命へを掲げて進む過程において、かず子は明らかに自身をへ貴族へから引き離していくのである。

かず子が自身を変革していくにあたつて利用されるのが戦時中の徴用体験である。かず子はそれによつて、へすつかり体が丈夫になり、へ畑仕事にも、べつに苦痛を感じない女になつたへのだと言う。だが、それがへ火事を出すなどといふ醜態を演じ、自身のへ血の色

まで少し変つた」ように感じられた後に語られていることに注意しなければならない。そうやって、かず子はさまざまな過去の事象を自身の変革へと結びつけていく。いわば、過去によって現在が方向付けられるのではなく、過去が現在によって捉えなおされ、未来へ「革命」へと向けられていくのである。

それに伴い、かず子は、さまざまに認識を変化させていく。かず子は直治の「夕顔日誌」を読むことで「不良とは、優しさの事ではないかしら」と思うのだし、さらにお母さまの言葉によって「札つきの不良」という言葉をポジティブに捉え返すようになる。そしてそれが「世間のおとなたち」に対する懐疑につながり、「恋と革命」の提唱へと至るのである。その「革命」という言葉は、レーニンやカウツキーの本、特にローザ・ルクセンブルクの「経済学入門」を読むことで得られたものだろう。かず子がその本から感じ取ったのは、「片端から旧来の思想を破壊して行くがむしやらな勇気」だった。しきりに「革命」を繰り返すかず子の口調は、同時代の「平和革命」という生温さを打ち破るような気迫さえ感じさせる。それはたしかに「日和見主義」を激しい口調で批判したローザ・ルクセンブルクを思わせるものもあるだろう。⁽²¹⁾

かず子はさまざまな他者の言葉を取り込みながら、自身を「革命」へと向けていく。言わば、かず子は自身を変革するためには、孤独

な内省だけでは駄目だということをよく分かっていたのだ。かず子が上原に向けて手紙を書くのも、そのために他ならない。

おそらくかず子にとって、「恋」の相手は誰でもよかったはずだ。「誰か」が必要とされたときに、六年前の上原とのキスが「へひめごと」として浮かび上がってきたということだろう。かず子はあらゆることを「革命」のために利用していく。そしてそれはかず子にとっては、生きていくための手段であつた。「私は生きて行かなければならない」のだ。

しかし、おそらく『青鬼』のサチ子なら、「死にたくはない」とは言っても、「生きて行かなければならない」とは決して言いはしないだろう。

私が何より嫌いなのは病気になることと、そして、それ以上に、死ぬことであつた。戦争が本土ではじまることになったら山奥へ逃げ込んでも助かるつもりでいたが、まだ空襲の始まらぬ時だったので、遊び場のない田舎へ落ちのびる気持ちにもならなかつた。

（『青鬼』）

サチ子は「生きてゐることは好き」と言うが、かず子のようにそれを肩肘を張って行うようなものとは思っていない。そして、世の

中の動きに対してはあくまでも距離をとって眺めていく。サチ子にとって「現実はまだ受け入れるだけ」なのだ。かず子と比較したとき、特に顕著になるのはそうしたサチ子の「柔軟さ」とでも評すべき姿勢であろう。

もつとも、それは『斜陽』のお母さまのような受動的・従属的な姿勢とも明らかに違うものである。サチ子は何よりも「自由を束縛される」ことを嫌うのであり、だから「選ぶ」という行為を重視する。

なんでも五十歩百歩で、五十歩と百歩は大変な違いなんだと私は思う。大変ではないかもしれぬが、ともかく五十歩だけ違う。そして、その違いとか差というものが私にはつまり絶対というものに思われる。私はだから選ぶだけだ。(『青鬼』)

そして「選ぶ」ことが出来ない「一つのもの」であるのが母であり、家であり、だからサチ子はそれらを嫌うのである。しかし、サチ子に戦後知識人が前提としたような実体的な「主体」を見出すことは出来ない。サチ子は普段は「モウロウ」としているが、「思いがけない窓がひらかれ気持ちにがにわかに引き込まれる」と「人をせきたて有無をいわず引き廻すような変に打ちこんだことをやりだす」。「私自身が私自身にびつくりする」のだ。⁽²²⁾ サチ子にとって、田代の

「あなたはあなたでなきやアいけない」などという言葉は、拒否すべき畏れさえあつたに違いない。

サチ子はまた、母のことを「ガッチリ屋のくせに無智そのものの世間知らず」と言い、サチ子を「天下にまれな助平」と批判する登美子さんのほうが実は「浮気」であり、「孤独で冷めたく我人ともに突放している」久須美も一方で「自分勝手、わがまま千万、途方もない甘ちゃん」なのだと言い、田代に対しても「へからだなんざア」とか、処女なんて、とか言つてくるくせに、案外そうでもないらしい」と揶揄する。そうやってさまざま人たちの矛盾、「甘さ加減」を論つていくのだ。

サチ子にとって、人間とは常に「馬鹿げた悲しさ」の中にあり、生きることとは常に「退屈」なものである。⁽²³⁾ 「私は退屈というものは案外ほんとに面白くないかと思つている。だつてほかに、ほんとに面白くという何かがあるのだろうか」。

四、よみがえる「母」、「革命」のゆくえ

サチ子は、田代の店のマダムをしているノブ子について、「表面強気のノブ子さんが実際は自分の行路に自信がなくて、営業のこと、恋のこと、日常の一々に迷い、ぐらつき、薄水を踏むようにして心細く生きている」と言う。そしてこの評は、『斜陽』のかず子におい

ても当てはまるのでは無いだろうか。

いかにもかず子の「危うさ」を指摘するのは容易い。「革命」へと向かうかず子に、サチ子のような「柔軟さ」は見られない。かず子の「生きてゐる事。生きてゐる事。ああ、それは、何といふやりきれない息もたへだへの大事業であらうか」などという嘆きは、おそらくサチ子にとっては笑止千万なものでしか無かつただろう。しかし、さまざまな人たちの矛盾・甘さ加減を論っていくサチ子もまた、へ馬鹿げた悲しさから免れているわけでは無いのである。サチ子は作品冒頭で、へ私は近頃死んだ母が生き返ってきたので恐縮している。私がだんだん母に似てきたのだ。と言っていた。そしてそうしたサチ子の変化が始まったのは、久須美と会ってからのことだつたのである。⁽²⁴⁾

サチ子は久須美が「天然自然の媚態」や「生きがい」を与えてくれたのだと言う。そして何よりも「自由を束縛される」ことを嫌っていたはずなのに、へ浮気をしないのが、久須美に対する感謝の一つの表現だと思ふようになる。それはサチ子自身言うとおり「世帯じみた」考えであり、「不自由、束縛」であるだろう。サチ子は、空襲後の情景を回想しながら、次のように言う。

昔、あのとき、あの泥まみれの学校いっぱいに溢れたつ悲惨

な難民のなかで、私はしかし無一物そして不幸を、むしろ夜明けと見ていたのだ。今私がふと地獄に見る私には、そこには夜明けがないようだ。私はたぶん自由をもとめているのだが、それは今では地獄に見える。暗いのだ。私がもはや無一物ではなためかしら。私は誰かを今よりも愛することが出来る。然し、今よりも愛されることはあり得ないという不安のためかしら。燃える火の涯もない曠野のなかで、私は私の姿を孤独、ひどく冷めた切なさに見た。人間は、なんてまアくだらなく悲しいものだろう、馬鹿げた悲しさだと私はいつもそんなときに思いついた。

〔青鬼〕

そしてサチ子は久須美と二人で暮らす中で、へ私はだんだん考えることがなくなつて行く、頭がカラになつて行くと言ふのだ。

一方、かず子はしきりに「革命」を主張するが、しかしその道のは平坦では無いようである。微用体験によって自身が変つたことを強調し農作業に熱中していたかず子は、お母さまの言葉によって実に簡単にそれを止めてしまうのだし、また上原との関係にしても、初めは熱烈に追いかけて、再会すると幻滅し、一夜を過ごした翌朝には「へもうこのひとから離れまい」と思い、しかし最後の手紙では訣別を宣言する。これらを一貫したものとして捉えるのは極めて

困難だ。實際、先行研究においては、「表面的・感覚的な好悪で愛憎を三転・四転させるこの場面のかず子」の「氣まぐれ・浅薄」が批判され、「人格の分裂」さえ指摘されている⁽²⁵⁾。

たしかにかず子は常に揺れ続けており、その「革命」にも明確な内容があるとは言い難いだろう。しかし、そうやってさまざまに揺れていく中で、かず子は自身の変革を図っているのである。『斜陽』において、かず子の「主体」が決して実体的に描かれてはいないということに注意しなければならない。言わば、かず子の「主体」とは、そのときどきの状況から自身を奮い立たせていく過程として現れるようなものだ。かず子の言明の中にあった「しなければならぬ」という言い方の繰り返しも、まさしく言葉によって自身を主体化させていく行為であったと言えるだろう⁽²⁶⁾。

六年ぶりに上原に会いに行ったかず子は、上原を「老猿」と形容している。かず子はへまるつきり、もう、違つたひとになつてゐるのだと言っているが、しかし、六年前上原に初めて会つた場面においても「奇獣」と記していたのだから、実際のところ、それは上原の変化というよりはむしろ、かず子が上原を記憶の中で作り変えていたということであろう。つまりはかず子の幻想だったということだ。だが、かず子は最後の上原宛ての手紙において、「へ生きる目標を与へて下さつたのは、あなたです」と言うのである。

かず子が上原と一夜を過ごした翌朝、弟の直治が自殺していた。

直治は遺書の中で、前から死にたいと思つていたのだが、僕の自殺を発見するのは姉さんで、さうして姉さんは、その時どんなに驚愕し恐怖するだらうと思へば、へとても出来そうになかつた」と言う。しかし、「何といふチャンス」。かず子は上原に会うために（それは直治の知らないことだったが）上京したために、家には直治と「頗る鈍物のダンサア」の他には誰もいなかったのだ。つまり直治に自殺のきっかけを与えたのは、かず子だった。少なくともかず子にとってはそのように受け止められたに違いない。自身の「革命」のためにした行為が弟の命を奪つてしまったのだ。かず子が「革命」に対する躊躇を感じたとしても不思議は無いだろう。それは、上原の妻に会つたときに覚えた以上のものだったはずである。

高田知波は、最後の手紙における高揚したトーンと、その直前に示されたコメント部分の落ち着いたトーンとの落差が、「最後の手紙」の内容を到達点として絶対化させない機能を果たしている」と指摘している⁽²⁷⁾。つまり『斜陽』の結末においても、かず子は揺れ続けているのだ。「革命」の行方はいまだ明らかではない。おそらく、かず子の中にさまざまな矛盾や中途半端さを指摘しようと思えば幾らでも出来てしまうだろう。そしてかず子は、「革命」を掲げて進むことによってこれからも誰かを傷つけてしまうことになるかもしれ

ない。直治の「なぜ生きていなければならないのか」という疑問にも一定の真実はあるし、かず子もまたそれは分かっていたはずなのだ（死んで行く人は美しい）。

重要なのは、かず子があくまでも揺れ続けていることである。揺れるのを止め、確固とした「主体」が確立されてしまえば、それはもはや戦後知識人たちが主張していた「主体」とほとんど変わらないようなものになってしまうだろう。だが、かず子はこれからも揺れ続け、その都度、自身の選択をしていくはずである。かず子は新しい現在に直面するたびに過去を捉え返し、未来Ⅱ「革命」へと向けて不断の引き直しを図っていく。そしてその結果がどうであろうと、自分で責任を取る覚悟は出来ているに違いない。へマリヤが、たとひ夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあつたら、それは聖母子になるのでございます。上原を選んだのも、その子供を欲しいと望んだのも、かず子なのだ。そのことをかず子は引き受けたうえで、それでも「私たちは、古い道徳とどこまでも争ひ、太陽のやうに生きるつもりです」と宣言するのである。⁽²⁸⁾

戦後、さまざまな人たちが「主体性」を持つことを訴えた。それは戦前・戦時中の自身のあり方に対する反省から出発したものであったのであり、戦後になっても毫も変わらない人間性の変革を求めたものであった。だが、前掲の座談会「文学者の責務」において、平

野謙は同人の中でただ一人「どうも僕にはピンと来ないね」と懷疑を表明している。「感覚の変革として、さういふゾルレンを掲げることによってスタート出来るかどうかといふことを、文学者である限りは慎重であつていいと思ふのだ」と言うのである。⁽²⁹⁾ 今日から見た場合、この平野の言葉が一定の真実を含んでいることは確かだろう。安吾は「墮落」することの重要性を主張したが、一方で「だが人間は永遠に堕ちぬくことはできないだらう」と述べていた。「なぜなら人間の心は苦難に対して鋼鉄の如くでは有り得ない。人間は可憐であり脆弱であり、それ故愚かなものであるが、堕ちぬくためには弱すぎる」⁽³⁰⁾。また、太宰は『斜陽』執筆後に発表された「かくめい」と題された小文において、次のように述べている。

じぶんで、したことは、そのやうに、はつきり言はなければ、かくめいも何も、おこなはれません。じぶんで、さうしても、他におこないをしなく思つて、にんげんは、かうしなければならぬ、などとおつしやつてゐるうちは、にんげんの底からの革命が、いつまでも、できないのです。⁽³¹⁾

その必要性がいくら認識の上で把握されていようと、実際に「にんげんの底からの革命」を行うのは容易なことでは無い。『青鬼』の

サチ子は「私はだんだん考えることがなくなつて行く」と言うのだし、『斜陽』のかず子の「革命」の行方もまた困難に満ちたものであるに違いない。そして彼女たちがともに苛立っていたのは、戦中戦後をつらぬく人間の「変わらなさ」に対してだったのである。

注(1) 「豊島さんのこと」(『現代日本文学全集33月報』一九五五・三、筑

摩書房)

(2) 豊島與志雄「太宰治との一日」(『八雲』一九四八・七)などを参照。

(3) 「文学精神は言う」(『世界文化』一九四六・二)。引用は『豊島與志雄著作集6』(一九六七・十一、未来社)による。

(4) 高木元子爵は三笠宮妃の父でもあり、そのような人物が窮乏のために自死したというニュースは、当時(一九四八年七月)おおいに話題を呼んだ。そのような中で『斜陽』が受容されていたということも考える必要があるだろう。

(5) 前掲(注3)。

(6) 『斜陽』は「新潮」一九四七年七月号から十月号にかけて連載され、『青鬼』は「週刊朝日増刊・愛と美」(一九四七・十)に掲載された。安吾は「わが思想の息吹」(『文藝時代』一九四八・三)の中で、「青鬼の禪を洗う女」は、昨年中の仕事のうちで、私のもっとも愛着を寄せる作品であるが、発表されたのが、週刊朝日二十五周年記念にあまれた「愛と美」という限定出版の豪華雑誌であったため、殆ど一般の目にふれなかったらしい。私の知友の中でも、これを読んだという人が殆どなかったので、淋しい思いをしたのであった」と述べている。

(7) もっとも華族であるかず子もまた、世間の内にいるとは言いがたい。実際、徴用の際には「外人みたい」だとか「スパイ」だとか言

われているのである。だが、かず子はそれに対して全く自覚的では無いのだ。そしてそれに対して、「私、日本人ですわ」という「ナセンス」を答えをしようのである。

(8) 「中央公論」(一九四七・一)

(9) 「改造」(一九四七・四)

(10) 「東京新聞」(一九四五・十・二六、二七)

(11) 「新潮」(一九四六・四)

(12) J・ウィクター・コシユマン「戦後初期における批判的マルクス主義の運命」(『戦後日本の精神史』一九八八・十二、岩波書店)、同「近代文学」と日本共産党」(『文学にみる二つの戦後』一九九五・八、朝日新聞社)、同「民主主義革命と主体性」(『思想』一九九六・十二)、米原謙「日本的『近代』への問い」(一九九五・三、新評論)、菅孝行「主体性論争と戦後マルクス主義」(『戦後日本占領と戦後改革3』一九九五・九、岩波書店、小熊英二「民主」と『愛国』(二〇〇二・十、新曜社)などを参照。

(13) 戦中から戦後への連続／断絶の諸相については、中村政則「戦後改革と現代」(『近代日本の軌跡6』一九九四・二、吉川弘文館)、赤澤史朗「戦中・戦後文化論」(『岩波講座日本通史19』一九九五・三、岩波書店)、総力戦と現代化」(一九九五・十一、柏書房)、米谷匡史「戦時期日本の社会思想」(『思想』一九九七・十二、吉田裕「戦後改革と逆コース」(『日本の時代史26』二〇〇四・七、吉川弘文館)、森武磨「総力戦・ファシズム・戦後改革」(『岩波講座アジア・太平洋戦争1』二〇〇五・十一、岩波書店)などを参照。これらの研究では基本的に戦後思想の「断絶」の死角となった「連続」が批判的に捉えられるが、それに対して、江藤淳「閉ざれた言語空間」(一九八九・八)、加藤典洋「敗戦後論」(一九九七・八、講談社)などでは「断絶」自体を批判し、「連続」を肯定的に捉えているのであり、その差異は見逃せない。

(14) 荒正人「第二の青春」(『近代文学』一九四六・二)、同「民衆とはたれか」(『近代文学』一九四六・四)などを参照。荒は野坂参三の

主張に明らかに影響を受けているのだが、共産党主流派は荒をはじめとする「近代文学」同人たちを個人主義的・アナキズム的であるとして激しく批判した。

(15) 「人間」(一九四六・四)。出席者は、荒正人・小田切秀雄・佐々木基一・地谷雄高・平野謙・本多秋五である。ただし後述するように、同人の中では平野謙ただ一人が異なった態度を見せていることに注意が必要だろう。

(16) 「新文学創造の主体」(『新日本文学』一九四六・五、六合併号) 初めのところで述べた豊島の「己を破壊させるかも知れない」という「貴族」もまた、そのような「主体」の一つに位置づけることが出来るだろう。豊島は「生長発展も破壊破壊も共に自律的なもの」だと言うが、この場合の「自律的」が通常とは甚だしく意味を異にしていることは言うまでもない。

(17) 「坂口安吾について②・二つの青春」(『坂口安吾全集4月報』一九四八・五、筑摩書房)。

(18) 林淑美「坂口安吾と戸坂潤」(『昭和イデオロギー』二〇〇五・八、平凡社) 参照。

(19) 座談会「平和革命とインテリゲンチヤ」(『近代文学』一九四七・四) 参照。

(20) ローザ・ルクセンブルクは一九一〇年あたりから既に日本に紹介されてはいたものの、その名が特によく知られるようになったのは一九二〇年代に入ってからのものである。そのきっかけの一つとなった井口孝親・訳『ローザ・ルクセンブルグの手紙』(一九二五、同人社の刊行はまた、戦間的な理論と穏やかで詩的な人柄との「乖離」を言われる風潮を生み出すことともなった。また戦前から戦後にかけて彼女を論じる場合、(コミンテルンの見解に倣い)その「誤謬」がしばしば指摘された。西川正雄「ローザ・ルクセンブルク解釈の流れ」(『歴史学研究』一九六〇・三)、伊藤成彦「増補版ローザ・ルクセンブルクの世界」(一九九八・四、社会評論社)などを参照。

(22) 安吾は「私は誰?」(『新生』一九四七・三)の中で、「主体」を実

体的なものとして捉える観方に激しく反発している。佐藤泉「私は誰?」(『国文学解釈と鑑賞別冊「坂口安吾事典・作品編」二〇〇一・九、至文堂)、同「坂口安吾「墮落論」(一九四七年)」(『戦後思想の名著50』二〇〇六・二、平凡社)を参照。

(23) 林淑美「逸脱する女の非労働」(前掲「昭和イデオロギー」)は、サチ子の「へ退屈」を戦中および戦後社会の国民的熱狂を相対化するものとして重視している。

(24) 原卓史「葛藤する『女』」(『中央大学国文』一九九九・三)

(25) 大森郁之助「斜陽」結尾の混乱」(『札幌大学女子短期大学部紀要』一九八七・二)

(26) あくまでも「主体」を拒否しているかのように見えるサチ子に比べた場合、「革命」を目指すかず子は、戦後知識人たちの「主体」により近いと言いうことも出来るかもしれない。だが、そこに重要な差異があるのも確かだろう。かず子の「主体」は実体としてあるのではなく、その都度構築されるものである。榎原理智「語る行為の小説」(『日本文学』一九九七・三)は、本稿とは異なる観点からだが、かず子の「主体」を実体的なものとして捉えることは出来ないことを指摘している。

(27) 「斜陽」論」(『国文学』一九九一・四)

(28) かず子は当初、自身を「貴族」と対立するものとして位置づけようとしていたのだが、しかし「革命」を掲げて進む過程において、もはや貴族/民衆というカテゴリー自体が意味の無いものとなっていた。しきりに貴族/民衆というカテゴリーにこだわる上原や直治とは、その点でかず子は明らかに一線を画しているのである。代わって持ち出されるのが「へ女」であり「へ母」であるのだが、それらも将来において破棄される可能性は充分に考えられるだろう。

(29) 前掲(注15)

(30) 前掲(注11)

(31) 「ろまねすく」(一九四八・一)